

352 Analysis of radioiodine therapy for well-differentiated thyroid carcinomas
Atsushi Kubo, Dept of Rad, Keio Univ
W.H.Beierwaltes, Univ of Michigan

During the period from 1947 through 1979, there were 456 patients with well-differentiated thyroid carcinomas treated with surgery and radioiodine in Univ of Michigan Medical Center. Of them, 109 (24%) had distant metastases at the time of initial diagnosis or during follow-up study. The therapeutic dose of I-131 administered was not less than 150 mCi.

The patients with lung metastasis had a 64 % survival at 10 years, while the patients with bone metastasis had a 45 % survival at 10 years. In this study, what factors will influence the survival of well-differentiated thyroid carcinoma with distant metastases was investigated. Age at diagnosis, sex, size of primary tumor, histopathology, sites of distant metastases had statistically significant factors.

354 放射線治療を行なった頭頸部原発Non-Hodgkinリンパ腫症例のGallium全身シンチグラムの検討
末山博男(千葉県がんセンター, 血化)
油井信春(同, 核医), 中野政雄(同, 放治)
嶋田文之(同, 頭頸)

昭和47年4月より55年6月までの間に当施設で治療したNon-Hodgkinリンパ腫90例のうち、頭頸部原発新鮮症例で根治的照射を行なったものは22例である。全例が初診時に⁶⁷Gaによる全身シンチグラムを施行されており、その所見と予後について検討した。シンチグラムでnegativeであった5例中4例が生存。観察期間11月～4年9月、頭頸部のみに限局してpositiveなものは7例中4例生存、観察期間7月～6年5月であるのに対して、肺門ないし縦隔に異常を疑われたものは4例中3例が死亡、観察期間4月～2年1月、横隔膜の下まで異常所見があったものは6例中全例が死亡、観察期間7月～12月であり、頭頸部以外に陽性所見の得られた症例の予後は不良であった。

頭頸部原発のNon-Hodgkinリンパ腫は⁶⁷Ga全身シンチグラムで陰性または頭頸部に限局した異常の場合、放射線治療によってよくコントロールされるが、胸部や腹部にまで異常の疑われる症例の予後は悪く、化学療法の併用が必要と考えられた。

353 胸骨傍リンパ節シンチグラフィの放射線治療計画への応用。

大竹英二、飯尾正宏、外山比南子、村田 啓、千葉一夫、山田英夫、高岡 茂、野口雅裕、川口新一郎(養育院、核放) 松井謙吾(横浜市大、放)

胸骨傍リンパ節は乳癌の転移経路の一つとして臨床的に重要な場所である。同リンパ節の描出には、造影剤を用いたX線法は技術的にむずかしく、リンパ節シンチグラフィによることが多い。我々は乳癌術後照射例を中心に胸骨傍リンパ節シンチグラフィを行い、同リンパ節の解剖学的分布状態を三次元的に検討した。^{99m}Tc-硫黄コロイドを用い、両側季肋下、深さ約2cmの部位に、各々2.5～3mCi注入した。RN注入約4時間後に、Conventional collimatorとBilateral collimatorを用いて撮影、三次元的に胸骨傍リンパ節を解析した。その結果、上部のリンパ節では位置が内側に偏位するもの、また、深さが5cm以上になるもの等があり、気管傍リンパ節と思われるリンパ節まで描出された症例もみられた。これ等のことから乳癌術後照射時には病巣部位(リンパ節)を症例ごとに検索し、それに応じた照射計画を立てる必要があることがわかった。しかし、今回のようなコロイド法では転移リンパ節に集積しないため、CEA抗体など悪性腫瘍特異性のあるRN薬剤の開発、応用をすすめている。

355 ^{99m}Tc硫黄コロイドを利用したリンパ節シンチグラフィ(治療計画と経過観察への応用)。
三木昌宏、佐藤道明、内野治人(京大, 1内)

悪性リンパ腫においては、組織診断、進展度の判定、治療計画、治療効果の判定、経過観察、再発の早期発見が非常に重要であるが、中でも進展度の判定が治療計画の決定に不可欠である。この事は悪性リンパ腫が腫瘍の中でも放射線感受性が高く、放射線治療の重要な地位を占めている事に起因するからである。核医学的にはリンパ節シンチ、肝、脾、腎、骨髄などのシンチが利用されているが、私達はここ約十年間リンパシンチとして^{99m}Tc硫黄コロイドを利用し、進展度の判定、治療計画、治療効果の判定、経過観察、再発の早期発見に役立てている。

手背部および足背部に局所麻酔をした後、各々1および3mCiの^{99m}Tc硫黄コロイドを注射し、2～6時間後に撮影する。異常像としては、腫大、欠落中断、左右非対称、側副路の形成、リンパ浮腫像などがあり、リンパシンチのみでも成りの診断が進展の分類や治療効果の判定に役立つが、⁶⁷Gaによる腫瘍シンチやリンフォグラフィ、血液学的、生化学的検査法を合わせて考えればより完全なものとなる多くの症例を経験したので報告する。